

佐賀県の地震活動概況 (2019年4月)

令和元年5月10日
佐賀地方気象台

【4月の地震活動概況】

4月に佐賀県内で震度1以上を観測した地震はありませんでした（3月は3回）。

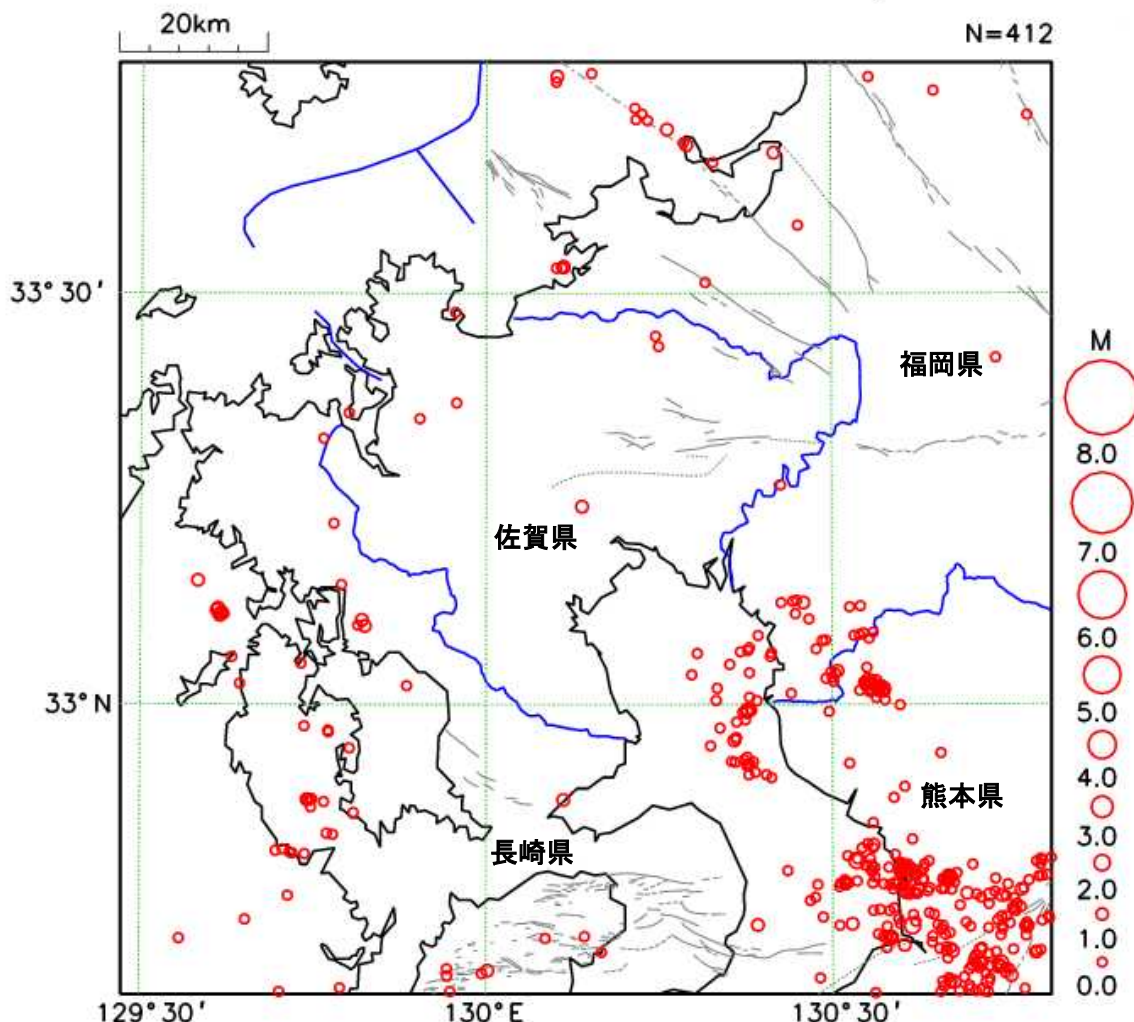


図1 震央分布図 (2019年4月1日~30日、深さ30km以浅、M \geq 0.0)
灰色の線は地震調査研究推進本部の長期評価による活断層を示しています。

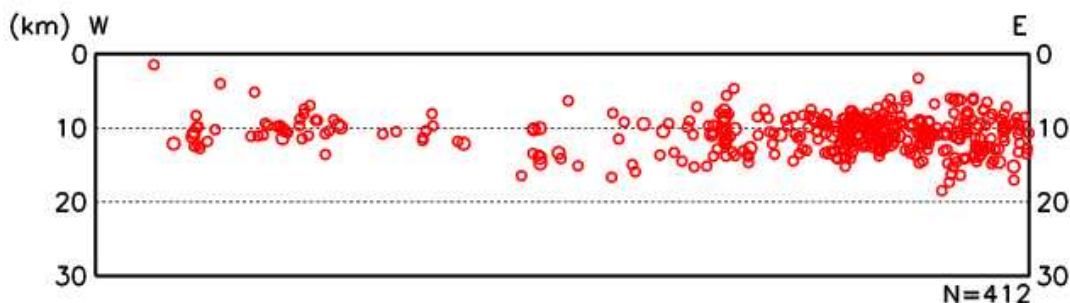


図2 断面図 (2019年4月1日~30日、深さ30km以浅)
震央分布図を南の方から見た断面図です。

本資料は、国立研究開発法人防災科学技術研究所、北海道大学、弘前大学、東北大学、東京大学、名古屋大学、京都大学、高知大学、九州大学、鹿児島大学、国立研究開発法人産業技術総合研究所、国土地理院、国立研究開発法人海洋研究開発機構、公益財団法人地震予知総合研究振興会、青森県、東京都、静岡県、神奈川県温泉地学研究所及び気象庁のデータを用いて作成しています。また、2016年熊本地震合同観測グループのオンライン臨時観測点（河原、熊野座）、米国大学間地震学研究連合（IRIS）の観測点（台北、玉峰、寧安橋、玉里、台東）のデータを用いて作成しています。

地震資料に使用される図の見方

佐賀地方気象台では、地方公共団体等による日頃の災害予防の活動を支援するため、「佐賀県内の地震活動概況」を作成し公表しています。また、佐賀県で震度4以上の揺れを観測した場合や佐賀県の沿岸に津波警報等を発表した場合には、防災対応に資するために「地震解説資料」を作成し公表しています。なお、福岡管区気象台では、地震活動概況や地震解説資料の他、九州・山口県内の地震活動の状況として「週間地震概況」、「月間地震概況」等も作成し公表しています。今回は、「平成 28 年（2016 年）熊本地震」を例として、これらの資料に使用される主な図の見方について解説します。

1. 震度分布図（図1）

震度分布図は、各地の震度観測点で観測した震度を地図上に表示し、地震による揺れの強さや範囲を表現したものです。震度5と震度6にはそれぞれ強弱があり、例えば震度6強は「6+」、震度6弱は「6-」と表示します。また、地震による揺れが広範囲にわたる場合には、図が煩雑にならないように、各地域内、各市町村内で観測した震度の中で最も大きな震度を代表させて表示することがあります（図1は地域別の震度分布図の例）。

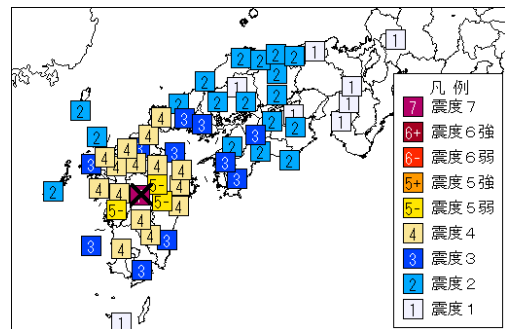


図1 震度分布図(地域別、×は震央)

2. 震央分布図（図2）、断面図（図3）

震央分布図は、地震が発生した場所を地図上に表示し、地震活動の面的な広がりや表現したものです。表示するシンボルの大きさや形を変えることで、地震の規模（マグニチュード、以下、「M」）や震源の深さを表現しています。

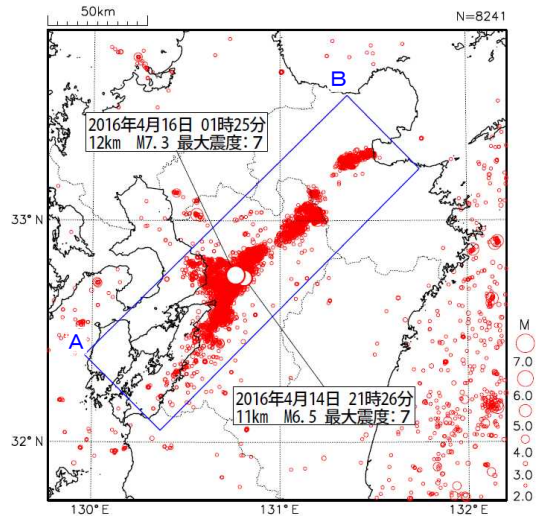


図2 震央分布図

また、断面図により地震活動の立体的な広がりを表現します。図3は、図2の中の青枠で区切られた領域を南東方向から見た断面図です。この断面図を見ると、地震活動が深さ20kmよりも浅い所で発生していることがわかります。

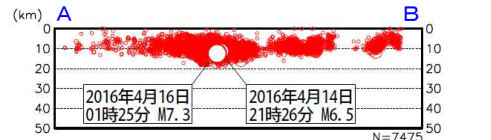


図3 断面図(A-B投影)

3. 地震活動経過図と回数積算図（図4）

地震活動経過図と回数積算図は、ある領域内で発生した地震の規模や数（積算回数）について、時間の経過に伴う変化を表現したものです。

図4は、図2の中の青枠で区切られた領域内の地震活動経過図と回数積算図です。この図を見ると、2016年4月16日にM7.3の地震が発生した後、時間の経過とともに発生した地震の規模が小さくなり、その数も徐々に減少していますが、活動は継続していることがわかります。

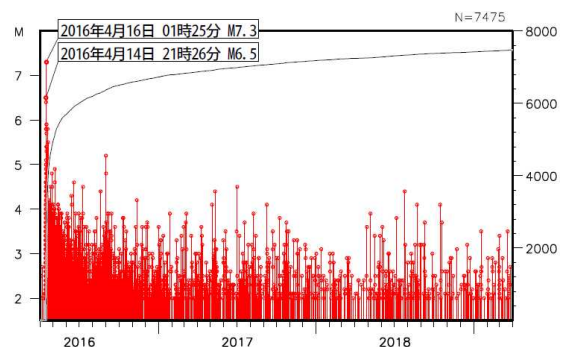


図4 地震活動経過図および回数積算図